

# アメリカインディアン探訪記

鈴木 誠二

|                         |             |
|-------------------------|-------------|
| 1. はじめに                 | ・・・・・・・・ 2  |
| 2. アメリカはもともとインディアンの国だった | ・・・・・・・・ 4  |
| 3. ルイス&クラーク探検隊ルートのトレイル  | ・・・・・・・・ 5  |
| 4. インディアンの考え方           | ・・・・・・・・ 6  |
| 5. インディアンの悲しい歴史         | ・・・・・・・・ 8  |
| 6. そして、今、インディアンは        | ・・・・・・・・ 12 |
| 7. 終わりに                 | ・・・・・・・・ 13 |

## 1. はじめに

重厚超大の時代に日本の産業の発展の裏方としてサラリーマン時代を過ごし、定年間際に、世の中が変わり、軽薄短小がもてはやされ、情報化社会がやってきました。資源のない日本で、サラリーマンの賃金が上がり、もはや、日本でのもので作りが困難になった新しい時代の流れについてゆくには、すでに脳のなかはかなりからびてきておりましたので大変な苦難でしたが、それでも何とか、無事、サラリーマンを終えることができました。そんなときに感じたのは、これからの日本の若い人達は、どんどん海外にでて、自分の実力で多に活躍してほしいということでした。しかし、海外で生活した経験もない私が、それを声を大にして口にしても説得力には乏しい、ということで、2005年に自ら、アメリカにわたり、現地の会社勤めをすることにしました。その年、すでに還暦を迎えるという歳でした。と言うわけで、好奇心の塊の老人が一人アメリカ生活を始めたというわけです。場所は、アメリカ大陸の真ん中、そこに行くには、日本から時間的に一番遠いネブラスカでした。

アメリカについたのは、一月の5日、おりしも大雪がふり、気温はマイナス 20℃、これはどれくらい所に来たもんだ、というのが第一印象でした。英会話に不安はありましたが、幸いにして回りには沢山の日本人の若い連中がおり、何とか無事アメリカ生活のスタートを切ることができました。しかし、受験時代に覚えた単語はすでに記憶から失せたものが多く、なかなか口から出てきませんでした。そこで、これは、もう一度英語の勉強をしなくてはということで、何か適当な本を原文で読もうと、本屋に立ち寄りしました。と、なんとその本屋の入口の一角、いわゆる、特選コーナーとでもいうような場所に、同じ名前の何種類もの本がずらりと並んでいるのが目に入りました。それが、「**Lewis & Clark Expedition**」という本でした。それまで、聞いたことのなかったこの本。「一体なんだ？ この本。」そこで、この本に興味をわき、二冊ほど手にいれたのが、**Lewis** と **Clark** の旅を解説した、「**The Journey of the Corps of Discovery**」、と「**Across the Divide**」と言うタイトルの本でした。これらは、1803年にアメリカがフランスから、アメリカの中西部を購入した、ルイジアナ買収のあと、ここに居住しているインディアンたちの生態を調査するためにジェファーソン大統領により派遣された学術調査隊(名目は学術調査隊でしたが、実際は、インディアンと講和条約を結ぶための使節でした。)の、探検隊の記録を解説したものです。丁度、彼等の探検から、200年が経過したということで、アメリカ中でその記念行事が催され、その一環として発刊されたものでした。とりわけ、後者のものは、この学術調査隊の歴史的な重要性を検証するような学術的なもので、かなりの難解なものでしたが、それだけに、この本を読んで、アメリカの歴史の裏を知ることができ、それまでのアメリカに対する知識がガラリと変わるような、まさしく、目からうろこが落ちるという表現がぴったりのものでした。

しかも、その探検隊の舞台がミズーリ川であり、この川はネブラスカの東を流れていま

す。というわけで、いつしか、この探検隊の足跡を辿ってみようという気持ちが湧いてきました。とは言え、その旅のトレイルは、片道 4,000 マイルのとてつもない距離。これを一揆に踏破するのは到底無理ということで、少しずつ、その足跡をドライブしてまわることになりました。

ところが、いざ、このトレイルをはじめ、各地に作られている、「ルイスとクラークの探検」の博物館(実は、アメリカには、この「ルイスとクラークの探検」に関する博物館が、200 近くもあるそうです。それだけ、この探検隊のもたらした意味は、アメリカの発展にとって重要なものだったというわけです。)に行くと、そこに解説されているものは、それは、まさしく、インディアンと白人の歴史的な出会いのそのもの。しかも、インディアンのことについては、これまで全く知らなかったようなことばかり。そんなわけで、インディアンに対する興味は増すばかりでした。

こうして、私の「ルイスとクラークの探検」のトレイルのトレースのドライブが始まったというわけです。そして、インディアンのことがますます身近に感じられるようになり、彼等のことをもっと詳しく知りたいと思うようになったというわけです。

#### それまでのインディアンについての知識

われわれの世代が会社勤めをしたころは、まだ、一ドル 360 円の固定相場の時代です。私が最初のボーナスで購入したのが、アメリカ製のポータブルの電動タイプライター。最初のボーナスでたいした額ではありませんでしたが、それでもこのおかげでボーナスは全部なくなりました。そんな時代のわれわれが、インディアンについて知っていたのは、インディアンというのは、この大陸を発見したコロンブスが間違えてつけた呼び名であり、そして、西部劇の中に出てくる彼等だけでした。アパッチとか、コマンチとか、シャイアン。顔にペイントをし、裸馬にまたがり、幌馬車隊を遅い、最後には騎兵隊に制圧されるという、獰猛な、彼等のことぐらいしか知りませんでした。

ネブラスカの北にサウス・ダコタがあり、ここには、かの有名な、四人の大統領の顔を巨大な岩山に刻んだ「ラシュモア・ナショナル・パーク」があります。アメリカ人にはとても人気のある公園で、独立記念日をはじめ、一年中、アメリカ各地から沢山の人が訪問して来ます。ところが、この直ぐ近くには、この四人の大統領よりも人気のあり、そして、その四人の彫刻よりももっと大きな顔が刻まれて岩山があります。それは、「クレージー・ホース」と、インディアンの酋長の、馬にまたがる勇姿を掘ったものです。その彫刻は、掘り始めてからすでに数十年が経っているとのことですが、りりしきその酋長の顔の部分以外は、まだ完成されていません。しかし、そのインディアンの人気は絶大なものがあります。そのわけは、この酋長こそ、インディアンと騎兵隊との戦いの歴史のなかで、唯一、騎兵隊を殲滅したインディアンの酋長だからです。もちろん、それは、リトル・ビッグホーンの戦いであり、その騎兵隊の指揮官こそ、「カスター将軍」でした。

クレージー・ホースを勇士とあがめる気持ちは、インディアンたちはもちろんのこと、

アメリカ人たちも負けず、劣らずもっています。それは、彼が、勇猛果敢な戦士だったからだと思います。策略を用いず、敵に真正面から、堂々と挑んで勝利を収める姿が、アメリカを愛する人達の心を打っているのではないのでしょうか

こんな風に、「ルイスとクラークの旅」の足跡を辿っていくと、これはもう、スー族、クロー族、ヒダツサ・マンダン族、アリカラ族、ショショニ族などなどが次々に出てきて、インディアン歴史の世界がどんどん開けて行き、興味は尽きないものがありました。

## 2. アメリカ、そこはもともとインディアンの国だ

### アメリカには、500以上のインディアンの部族が住んでいた

こうして、ミズーリ川を遡り、沢山の博物館を訪ねて歩きました。そして、手に入れたのが、アメリカ大陸に住んでいたインディアンの部族の分布。そこには、あのアメリカ大陸の東海岸から西海岸まで、これまで知らなかった部族の名前が、びっしりと書き込まれていたのです。東海岸には、アルゴキン語を話す沢山の部族がいました。アパラチア山脈の西には、広大なアメリカ大陸が広がっていますが、そこには、ラコタ語(スー語)を話す部族、ナバホ語族、タノア語族、ナ・デネ語族、さらには、ベヌート語を話すインディアン達がいたのです。その数に圧倒されて、後で調べてみたら、なんと、アメリカには、500以上もの部族が住んでいたとのことです。これだけ沢山のインディアンがこのアメリカ大陸で長い歴史を刻んでいたというさえた証拠は、今のアメリカの実に沢山の州の名前が、インディアンの言葉に由来していることです。オレゴンというのは、「美しい川」、アイダホは、「山峰の宝石」、コロラドは、「山の人」、アリゾナは、「小さな泉の場所」、ダコタは「同盟者」、ネブラスカは「広い川、平らな川」の意味です。そのほか、カンザスは「南風の人々」、オクラホマは「赤い人々の土地」といった具合です。このほかにもまだまだ沢山あります。新しいアメリカも、こうした昔からのその土地の名前を捨て切れなかったというわけです。

### 300ものインディアン保護居留地

インディアンの文化に興味をもった私は、彼等の住んでいた土地を実際に見てまわることになりました。今、彼等は、インディアンの保護居留地区に住んでいます。彼等は長い歴史のなかで、アメリカ政府から強制的に移住をすることを強いられました。このことについては、後ほど、インディアンの悲しい歴史について詳しく述べます。先祖との繋がりを大切にし、自然とともに生きてきた彼等には、長い間住み慣れた土地を離れての生活は決して幸せなものでなく、結局、もとの荒れ果てた荒野の土地に戻ることを決心したのです。それがインディアンの保護居留地区（Reservation）で、かれらは、今、そこで近代文明からは取り残された形で極めて貧しい生活をしています。それぞれの部族が自分達の保護

居留地区にすんでいます。そんな居留区が、現在、全国に 300 もあるといわれています。しかし、かつては数限りなく大草原を走り回っていたバッファローは姿を消し、そして、太平洋に注ぐ川には無数の遡上する鮭やマスも、電源開発のために消滅しています。彼等の生活の手段はなくなっているのです。その結果、政府は彼等に生活保護の手を差し伸べているのですが、自活できずに生活保護を受けるということは、決して、豊かな生活を築くというものではなかったようです。インディアンの居留区は、自治が認められており、ナバホの居留区などでは、自分達独自の法律さえ持ち、部族が独自の政治を営んでいるとのことですが、それがまた逆に、彼等に文明社会からの置いてきぼりを余儀なくしているとのこと。また、北西部の居留地に住むインディアンのなかには、未だに独立運動をしている部族もあるそうです。かれらは、アメリカの中では、先住民ということで、比較的早い時期に市民権が認められ、人種的には、比較的高いステータスを持っています。

### 3. ルイス&クラーク探検隊ルートのトレイル

#### 白人とインディアンの出会い その原点

アメリカの中西部には、それまでの西洋人白人の知らなかった人たちがすでに何百年にもわたり、そこを生活の場としていたというわけです。「ルイスとクラークの探検隊」は、旅のなかで 50 もの部族と出会い、かれらと友好の講和条約を結んでいったのです。沢山の部族のなかには、もちろんアメリカの合衆国に組み入れられることに疑念を持つ部族も沢山ありました。しかし、ルイスとクラークは、丁寧に新しいアメリカはインディアンのために、彼等の生活を守るということを約束して信用を勝ち得ていきました。インディアンの信頼を得るのに友好であったのは、この探検隊が軍隊でなかったこと、そして、人数が数十人足らずであったこと、友好のためのインディアンに対する沢山のお土産、そして、何よりも、通訳として同行したインディアンの女の存在です。彼女は、ロッキーの山中に生息していたショショネ族の女だったのですが、小さいころ、敵のインディアンであるヒダツサ族に略奪され、そのごのフランス人の妻となっていた女でした。インディアン達は、この女が探検隊にいること、しかも、彼女は、生まれたばかりの赤ん坊を負ぶっての旅を続けていたのです。そんな彼女の姿をみて、この探検隊が武力を行使するために来たのではないと安心したのです。しかし、実は、この部隊の隊長のルイスは、いざと言うときには、武力でインディアン達を征服するだけの最新鋭の兵器を、軍隊から調達し、また、それを改良して携えていました。しかし、この大冒険を達成するために必要だったのは、こうした武器よりも、ロッキーをこえるための荷役のための人夫や、食料の調達、そして、道案内といったインディアン達の協力だったのです。そのためには、どうしても、インディアンとの間の信頼関係が必要だったというわけです。そのインディアンが 50 部族もあり、それぞれが互いにいがみ合っている間柄だったのです。こうした中ですべてのインディアン達と友好条約と言っても、明らかに、合衆国がこの地を支配するということを説得しながら旅を続けていくのですから、これは、まるで成功する確率の極めて低い、夢物語では

ないかと思われるような波乱の旅だったのです。

ちなみにこの探検隊の為した偉業を紹介すると、

50 ものインディアン部族との講和、ならびに、インディアンの部族の実態、風俗・習慣の調査

アメリカ大陸を横断する、太平洋までの通路の発見

アメリカ中西部の詳細な地図の完成

発見した植物の新種 178 種

発見した動物の新種 122 種

などがある。

#### 4. インディアンの考え方

ルイスとクラークが旅の間に、インディアンの考え方について沢山の発見をしている。それは、それまでの西洋人白人にとっては、全くの違う価値感からくるものであり、彼等が長い年月、自然とともに生活し、培ってきた彼等独自の考え方だ。その一部を紹介したい。

すべての動物は神が創造した。ノアの箱舟と全く同じ伝説がある。

インディアン達は、すべての動物は神が創造したものと考えています。人間もまた、はじめは動物たちと同じ立場でした。いや、動物達のほうが早く創造され、かれらは生活の術を人間達よりもずっと多く、そして、沢山の知恵を持っていると考えていました。動物のほうが人間達よりも賢かったのです。ですから、人間は沢山の動物から生きる術を学んだのだと考えています。そんなところから、インディアンに伝わる伝説のなかで沢山の動物が人間を助けてくれる話が出てきます。

コヨーテは、人間達が寒い冬を越すのに必要な火を持ってきてくれました。そして、それを大事に保管する方法を教えてくれたのだといわれています。コヨーテこそ、人間達にとっては命の恩人だったのです。

また、バッファローは自分達のために命をささげているのだと信じています。インディアンは、一人の人間が一年を生きていくためには一匹のバッファローが必要だと思っています。食料となる肉はもちろんのこと、毛皮も、角も、脂も、そして、足の腱も、何もかも自分達の生活になくてはならないものです。移動しながら生活している彼らのテントの後には、そんなバッファローの残骸は何も残っていなかったのです。すべてのものを利用していたからです。しかし、かれらは必要以上の狩はしなかったのです。それは、彼等が、もし、余分な狩をすれば、それはやがてはバッファローがいなくなることを知っていたからです。どんなに沢山の自然の産物も限りあることを知り、それを大事にしてい

た彼らの生き方に、学ぶものがあるのではないのでしょうか。ですから、自分達のために命をささげてくれるバッファローに感謝して、かれらは狩の前にはバッファローダンスを踊るのです。

熊は、インディアンにとっては神聖な動物でした。それは、熊は寒くなると土のなかにもぐり、死んでしまうと考えていました。ところが、彼等は、春になり、野原に草花が芽吹き、動物達が姿を見せ始めると、かれらは、土の中から生き返り、戻ってくるからです。それは、まさに死んだものが生き返るという不思議な力をかれらが持っていると思っていたのです。ですから、熊を退治するときには、かれらは弓矢を使わず、素手で戦い、これをしとめるというしきたりがありました。そして、どれだけの熊をやっつけたかは、戦士が敵のインディアンを打ち負かした数のなかに加えられていました。こうして彼らの部族の中での名誉が認められ、地位が上がっていったのです。クビのまわりに飾られた熊の爪のネックレスは、そのインディアンの勇士をものごたるものなのです。

また、ワシは、いつも空高く、悠然と輪を描きながらとんでいます。ですから、いつも神様のいる天に近いところで、自分達を監視していると思っていました。そんなワシを神様の使いだと信じ、たとえ他人は見えていなくても、ワシが空からいつも見張っているということで、影で悪いことをするようなことを謹んでいたわけです。

クモの巣は、不思議なものだと思いました。あの巣は、西洋人が持ち込んだ恐ろしい鉄砲の弾があたっても平気です。弓矢の矢も素通りしてしまいます。ですから、彼らは、戦いでは、クモの巣が自分を守ってくれると思っていました。この言い伝えをもとにして作られているのがドリームキャッチャーなのです。あの虹のように素敵な色をしたクモをかれらはとても尊敬しているのです。スパイダーマンが人気のあるのもこうしたことが背景にあるのではないのでしょうか。

そのほかにも、伝説のなかには沢山の動物がでてきて、様々な生活の知恵を授けてくれます。文字を持たなかった彼等はこうして自分達の文化を受け継いでゆきました。

私達が当たり前と思っていることでも、生活の手段が違くと全く違った考え方があることを紹介します。

これは、「ルイスとクラークの探検」の中に出てくる話です。彼らは、それまで地理に関する知識が全くなかったロッキーの山のなかで、地図を作りながら探検を進めていました。そして、ある部族と遭遇し、彼等にその地域に関する情報を尋ねたときです。そのとき、酋長は、真ん中に囲炉裏のあるアースロッジのなかで、大地に、砂で地形をつくり、そこに、杖でいろいろな説明をしてくれました。が、その地図は、西洋人たちのみた実際と全く違っていたのです。それは、彼等の地図のスケールは、一日で移動できる距離を同じ長さで表していたのです。西洋人は実際の距離が長さを表します。縮尺が全く違うのです。しかし、かれらは、ほかの部族との距離、そして、自分達の移動の距離をこのように表すことにより、敵が襲ってくるまでにあと何日かかるのか、自分達が目的地にたどり着くまでにどれだけの食料が必要かということが、この地図で一目瞭然なのです。さて、われわ

れの地図と彼等の地図ではどちらが実用的であるといえるでしょうか。天体で光年という単位で距離を表しますが、全く同じ考えです。スケールのおおきさも含めて、考えてみる必要があります。

## 5. インディアンの悲しい歴史

ここに、あるインディアンの子孫の言葉があります。これは、決して遠い昔の話なのではなく、お爺さん、お婆さんの話として話されたものです。

多くの原住民のアメリカ人の人々は今日、キリスト教を信じている。か、もしくは、古くからある信仰とキリスト教との混合的なものを見出してそれを信じている。また、他にもちぐはぐな記憶に頼っているものもいる。インディアンの子供たちを、文化の伝統を断ち切ろうと彼らの家族からの影響を取り除くために、政府が約束して作った寄宿学校に収容した。この学校は、非常に厳しい批判を沢山浴びました。“私のお婆さんは、13 人の子供を生みました。が、生残ったのは、そのうちのたった 4 人だけでした。”と Cayuse-Walla Walla の Kathleen Gordon が、その悲しい気持ちに溢れた声でいっている。“彼らは、教区の学校に無理やりに行かされるまで、流暢に言語を話していました。・・・私のお母さんのお兄さんの Palph は、Salem[Oregon]の近くにある Chimawa Indian 学校につれていかれました。彼は、そこで、彼の生活様式を変えようと、強制的に自分の部族の言語で喋るのを禁止されたために、そこから逃げ出したのです。・・・3 度ほど、逃げ出しては捕まえられ、捕まえられては逃げ出し、とうとう、最後に戻されたときには、彼にはパンと水しか与えられませんでした。そして、彼はそこで死んだのです。・・・私のお母さんの世代は、われわれの生活を懸念して、仕方なく英語を話すようになり、そして、我々のために我々の言葉を話すと罰せられるようになったのです。”

原住民の言語の喪失というのは、多くの年長の人達にとっては、悲嘆の根源のようなものです。Kathleen Gordon が説明しています：“偉大なる創造の主が、我々が生命を授けられたときに我々に対する贈り物として彼から我々にくれたものが[言語]なのです。彼が全ての鳥達に歌を、そして、それぞれに独特の歌を与えたように、全ての動物達にかれらにそれぞれ別の鳴き方を与えたように、我々もまた、もうすでに取り上げられてしまったけれど、自分達に独特の言葉をもっていたのです。” Nez Perce 族の Allen Pinkham にとって、言語の喪失とは、自己認識の喪失でもありました：“文明がわれわれのところに押し寄せてきたとき、・・・政府はこのように言っていた：‘全てのひとは、いまや英語の名前を持たなければならない；あなた方は文明開化されたのだ。’そうして、われわれ Nez Perce 族の人々の殆どが、最後には、自分の本当の名前ではなく、英語の名前をつけることになった。彼らがやろうとしたことは、われわれを新しいこの文明化された市民に作り上げるためにわれわれからわれわれ自身の自己認識を取り去ることであった。”



よく協定のなかで保証されている狩猟とか漁業の権利が、開発や法的な障害により、その実行が制限されるようになったものとして新たな対立の原因となっているのである。若い世代の Chinook の Tony Johson が言っている：“私のお爺さん、そして、そのほか、私よりも以前の人々は、勿論、魚を捕っていた人たちであり、したがって、漁業権と言うものが私にとっても現実に非常に重要なのである。・・・漁業をして生計を確立しようと考えている Chinooks 族の人が非常に沢山いるのである・・・われわれは、魚、——チョウザメ、鮭、キュウリウオ、そして、ヌマガレイといったような魚を必要としているのだ。こうした魚達は、Chinooks 族であるために必要な魚なのである。・・・われわれのインディアンとして魚を捕る法的な資格は 1980 年代に取り上げられてしまった。・・・私の年代か、あるいは、それ以前の人たちは、どうやって刺し網で魚を捕るか、そして、その網を修理する方法、あるいは、船を走らせる方法を学ぶことができた。しかし、最近の若い子供たち、私の息子の年代では、そのチャンスすらないのだ。”

インディアンの知識や若い人たちに対する価値を見てゆくことは、これまでに起きたことの後にもがいているようなものである。“われわれは、同化という過程のために衝撃をうけたインディアン家の三世代の人々について話をしているのである。”と Jeff Van Pelt が言っている。“われわれの教育のなかで、われわれが古い法律に基づいて彼らを見つめなおし、検証しないのであれば、われわれは、われわれの先祖がいたその場所に辿りつくことができないであろう・・・しかし、われわれは、どうすればわれわれの子供たちに教え、そして、導いていく手助けをすることができるのであろうか？ 汚染された水を例にしてそれができるだろうか？ そこには、もういない鮭でそれができるだろうか？ ワシだってもういないし、狼も姿を消した。熊もいないのに、それができるだろうか？ 私が自分の子供に教えるために出かけようと思うところはどこにあるのだろうか？”

Carolyn Gilman “ Lewis and Clark Across the Divide “

このように、彼らが、今のように居留保護区のなかで生活をするようになった裏には、大変な悲しい物語があります。しかし、そこにいたるまでもっともっと悲しい歴史があります。これはアパラチア山脈の、今でいうスモーキーマウンテン辺りに住んでいたインディアンチェロキー族の物語です。

このグレートスモーキーマウンテン。アメリカが誇る自然の動植物の宝庫。その紹介パンフレットにはこんなことが書いてあります。

世界中で、このスモーキーマウンテンに匹敵する、動植物の豊富なところはほかにない。北ヨーロッパの森に比べて優れているのは、ここには、1500 種類以上もの植物、そして、数十種類の天然の魚、200 種類以上の野鳥、それに、60 種類の動物達が生息して居る。こ

うした、天然の宝庫は、現在、世界遺産に指定され、その保護が進められている。

もともと、この地に生活していた **Cherokee** は、ここを彼らの言葉の意味で、“煙のような、緑の地”を意味する“**shaconage**”と呼んでいました。彼らはこの地に農場を開拓し、ログハウスを建てて、そして、ヨーロッパ人が入植して来たときには、彼らは融和する方針で受け入れてきたのです。しかし、富を優先するヨーロッパ人は、彼らの土地を奪ってしまったのです。1790年代に白人達の入植が始まり、彼らを追いやりはじめ、そして、チェロキーは中西部へと強制的に移住を強いられました。過酷な旅を強いられた彼等は、出発する時には1万数千いたのが、キャンプに到達したときには、その1/3は、死んでしまったということです。これが有名な「涙のトレイル」となって今に伝わっています。一部のチェロキー族はこの山奥に逃れてここに残り、この地で生活は続けましたが部族の殆どは、現在のオクラホマまで連れて行かれたのです。それは、1830年代の頃のことです。

同じような悲劇は他にも沢山あります。

### ネブラスカ・ポンカ族の話

1700年代の初めに、ポンカ族は彼らの故郷サウスダコタからネブラスカにやってきました。1877年になり、政府はポンカ族の酋長をオクラホマのインディアン保護地域に視察に送りましたが、酋長はその土地があまり気に入らなかったのです。しかし、彼がふるさとに戻ると、部族の大部分のものは、すでに移住をする用意を済ませているという状態だったのです。オクラホマに彼らが移り住んだのはよいのですが、しかし、彼らはそこで食料を手に入れることができず、部族の沢山のものが病気で倒れてしまい、部族の1/3近くの人々が亡くなってしまいました。酋長のスタンディング・ベアの息子が亡くなると、彼らの一族は、その体を密かに、ネブラスカに運び、神聖なる地に埋葬しました。インディアン達は、居留地から出ることを認められていなかったもので、彼らは、裏切り者として扱われるようになったのです。そして、スタンディング・ベアと彼の一族が自由になるにはそれから何年も掛かったのです。1881年になり、ネブラスカにあった彼らの故郷の地が彼らに返還され、部族の一部はネブラスカに戻りました。そして、今日、ネブラスカ・ポンカの本拠地がネブラスカに置かれるようになったのです。

### Wounded Knee (South Dakota) の大虐殺

これはインディアンの虐殺についての悲しい歴史的事実です。それを解説分から紹介します。

1890年の12月29日の朝に、Siouxの酋長Big Footとその部族のもので彼についてゆくもの350人がWounded Knee Creekの土手にキャンプを張っていました。彼らの周りをアメリカ騎兵隊が取り囲み、Big Footの逮捕とかれの戦士達の武装解除を迫っていました。状況は非常に深刻でありました。いざこざが何ヶ月もの間続いていたのです。

## Ghost Dance の願い

以前に、誇り高き **Sioux** 族は、自分たちのどこにでも自由にいくことができる生活が破壊され、バッファローがいなくなり、そして、自分たちが生きていく間は、インディアン

の統治官に依存して居留地に拘束されるということに気づきました。かつての栄華の日々に戻ろうという絶望的な挑戦のなかで、たくさんの人々が、**Wovoka** という教条的な祈祷師の神秘的な新しい予言に救済を求めたのです。**South Dakota** の **Sioux** 族の使節が **Nevada** まで、かれの言葉を聞くために旅にでました。**Wovoka** は自分自身のことを救世主と自称し、死というものこそ、インディアンたちがたくさんの狩猟をしながら生活することのできた



Massacre of Wounded Knee の解説をした看板

古い時代にもどることが出来る道であると予言しました。新しい土地の潮のような波が大地を覆い、白人達を埋葬し、そして、もとの大平原に戻すことができると予言したのです。そのようなことが現実になるように、インディアンたちは、**Ghost Dance** という踊りを踊ることにしたのです。たくさんの踊り手が、ワシやバッファローをイメージするように飾られた、色とりどりのきらびやかな衣装をまといました。彼らは、この“**Ghost** の衣装”が、自分たちをあの青白いメッキの弾丸から身を守ってくれるものと信じていたのです。そして、**1890** 年の秋には、この **Ghost Dance** は、**Dakota** の居留地の中にある **Sioux** 族の村の間に広まってゆき、それが、インディアンたちを勇気づけ、白人達に恐怖を与えるようになっていったのです。絶望的になった **Pine Ridge** にいたインディアンの統治官はワシントンにいる彼の上官に、次のような電報を打ったのです。”インディアンたちは、雪のなかで踊り狂い、野蛮で、狂っています……。われわれは防衛策が必要で、しかも、それはいますぐに、です。指導者を逮捕する必要がある、事態が収まるまでどこか軍の施設に拘束すべきです。これは、今すぐに実行すべきことです。“そして、**Standing Rock** 居留地にいる酋長の **Sitting Bull** を逮捕するようにとの指令が出ました。**Sitting Bull** は、**12** 月 **15** 日の襲撃で殺されると、次に目標になったのは、酋長の **Big Foot** だったのです。

かれは、**Sitting Bull** の死を知り、**Big Foot** はかれの部族の人を **Pine Ridge** 居留地に安全な場所を求めて南に移動をさせました。軍は **12** 月 **28** 日にこの集団を拘束し、彼らを **Wounded Knee** のはずれに連れてゆき、そこでキャンプをさせたのです。次の日の朝、肺炎と乾燥で苦しんでいた酋長は、自分の部下の戦士達の真ん中に座り、そして、軍の指

揮官と協議をしました。と、突然の朝の薄明かりの中に銃撃の音が鳴り渡りました。数秒間の間に積もり積もった思いがいきなり爆発したのです。インディアン達は取り上げられたライフルを取り戻すために走り回り、一方、軍は、**Sioux** のキャンプに容赦なく一斉射撃を加えたのです。高台からアメリカ軍の **Hotchkiss** 砲はブドウ弾をインディアンのテント小屋に機銃掃射したのです。男、女、そして、子供たちが逃げ回るなか、砲弾の煙が当たりてに充満していました。多くのものが、まるで十字砲火を見下したように打たれることを承知でキャンプの隣にある峡谷のほうに逃げてゆきました。

やがて、銃弾の砲火が収まり煙が晴れ渡ると、なんとその場所には、酋長の **Big Foot** をはじめ、**300** 人もの **Sioux** 族の人たちが死んでいたのです。騎兵隊のほうは **25** 人の犠牲者が出ました。残された騎兵隊が死者の片付けという過酷な仕事につくと、おりしも北からの強烈な厳しい寒波がやって来たのです。数日後に彼らはこの事件の後始末を完了しましたが、しかし、この **Wounded Knee** で起きた虐殺は、あの **Ghost Dance** の運動を完全に抹消し、インディアンの抵抗戦争を終末に導いたのです。

大虐殺は、**Wounded Knee** だけではありませんでした。カンザスでも、**Kidder Masacre** という事件がありました。でも、こうした **Historic Site** を訪れる白人の数はほんのわずかです。否、あえて知りたくないというのが事実だと思います。

オクラホマと言う州の名前は、チョクト族の言葉で「赤い人々の土地」という意味です。そして、西洋人たちがアメリカの中央大平原に入植してきたときに、沢山のインディアンの部族がここに強制的に移住をさせられた土地でもあったのです。

## 6. そして、今、インディアンは

インディアンの居留保護地域というのをご存知だと思いますが、では、一体、アメリカにはどの位の保護地域があるのでしょうか。

ここは、合衆国の政府により定められたアメリカ先住民部族により治められている地域なのです。現在、アメリカには、**550** 以上の先住部族がいるといわれています。いわゆるインディアンの部族がこれだけあり、アメリカ中に、**310** 地域の居留保護地域があるとのこと。これらの居留区の広さは、合計すると **55.7million** エーカーあり、アメリカ全土の **2.3%** に当たります。そして、**12** のインディアン居留地は、ロード・アイランドの広さ(**776** エーカー)より広いそうです。この地域では、インディアン部族の協議会が連邦政府に変わって統治しているのです。つまり、ここは自治区なのです。有名な居留地は、アリゾナにあるナバホ居留地。ここは、アメリカ最大の居留地で、強い自治権を持ち、一つの独立国家にも等しい力を持っています。有名なモニュメントバレーもここに 있습니다。このナバホ族は、独自の言葉を持っており、その語尾変化に独特のものがあることから、第二次世

界大戦では、この言葉が暗号に使われました。軍の指令文は、ナバホ語に翻訳され、これが受信されたあと、再び、ナバホ族出身の兵士により英語に戻されたそうです。この暗号は当時の日本軍は全く解読が不可能だったそうです。

ただ、こうして、インディアンが自ら統治しているという、彼らには自由が保障され、豊かな生活を営んでいるかのごとく思われますが、果たして実際はどうでしょうか。アメリカをドライブしていて、沢山のインディアン居留地の中を走り回りましたが、どこもインディアンの居留地に入ると、それまでの白人の住んでいる地域とは周りの景色が一変します。土地は開発されておらず、また、住宅も貧相なテラスハウスが点在しているだけ。土地がやせている証拠で、ここでの経済的な自立は到底不可能と思われるようなところばかりです。農場を開拓するにも、また、牧場を経営するのにも、アメリカでは規模が大きく、膨大な資金が必要となりますが、彼らには、その元手がないのです。今では、政府により生活保護を受けて細々と生計を立てているのがやっと。失業率が高く、というより、産業がほとんどありませんから、かれらは、日雇いで白人の経営する農場や牧場に出稼ぎにいくくらいしか収入源がありません。その結果、彼らは酒におぼれ、麻薬に染まっています。

しかし、インディアンがもともとこんな生活をしていたのではありません。チェロキー族はもともとアパラチア山脈の南部に住んでいました。しかし、ここに、金鉱が発見され、そのほか鉄鉱石や石炭が埋蔵されていることが分かったと、アメリカ合衆国政府は、彼らに代替地としてオクラホマの地域をインディアン居留地として定め、彼らにここに移住することを求めました。チェロキー族は、ほとんどが反対をしたのですが、武力に勝るアメリカは彼らを強制移住させました。そして、移住のために集められた、17,000 人のチェロキー族は、この旅の途中で 4,000 名以上が病気で亡くなったのです。チェロキー族の言語で、この出来事は、「われわれが泣いた道( *nvnadaulatsvyi* )」と呼ばれています。このことは先に説明いたしました。

## 7. 終わりに

アメリカ大陸がもともとはインディアンの国だったのです。華やかな近代国家アメリカの歴史を、インディアンの側からみるとすこしちがったアメリカが見えてくるはずです。これは、先住民族の悲劇と言うよりも、大自然のなかで、動物達と共存し平和に、そして、心豊かに生活していた彼らの価値感を探り、そして、そのなかに、この地球が決して無限のものではなく、そして、この素晴らしい地球の自然を、自分達の子孫達に残していくために、どんな風に考えていけばよいかのヒントがあるのではと思い、多くのインディアン達の生活の場を訪問した印象をまとめたものです。

(平成21年9月11日)